

59
まいん

やまね
山根グラウンド



撮影年代不詳
別子銅山記念館所蔵

作務の心が生んだ
三万人の巨大スタジアム

やまね
山根グラウンド

は、昭和2年(1927)別子銅山の最高責任者となる住友別子鉱山(株)の常務取締役役に就任した鷺尾勘解治の指揮のもと、住友各企業の社員による作務(禅宗の教えで、不平不満なく喜んで会社や人のために奉仕し、善行をなす勤め)によって建設が行われ、昭和3年(1928)に完成しました。

収容人員は約3万人で、住友各企業合同の運動会などに利用されていました。



現在の山根グラウンド



グラウンド入口の楠木

現在、石積による階段状の観客席はたいへん立派なもので、ほぼ当時のまま残っており、多目的グラウンドとして野球やサッカー、自治会の運動会、各種イベント、一部は公園などに利用されています。

グラウンドの入口には楠木があります。この楠木は、明治21年(1886)に製錬所を作った際、根元から伐採し埋められていました。

ところが、製錬所が移転40年余り経った後、グラウンド整備のため掘り起こされました。その際、楠木が根元から2本3本と枝分かれしているのが発見されました。

鷺尾勘解治がこれを見て「諸君たちもこれからいろんなことがあるだろうが、この楠木は40年もここに埋められていたんだから、君たちも我慢することが大切だ」と教えられました。

楠木は今も力強く枝を広げ、根を大きく張り、生きることを私たちに語りかけています。

